

研究論文の書き方・まとめ方

田中 武夫 (山梨大学)

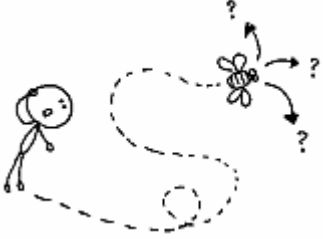
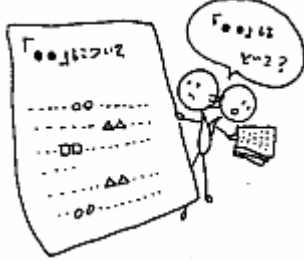




0. はじめに

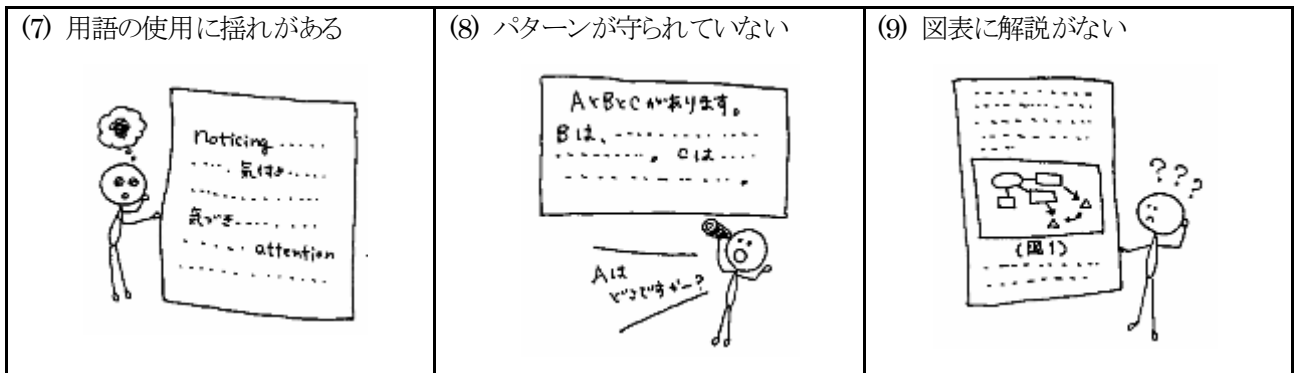
どのような研究であれ、最終的には研究論文の形にまとめることになる。この論文作成は、研究プロセスの最終段階とも言え、内容が優れた研究であっても最終段階の論文作成がまずければ良い研究にはならない。本発表では、英語教育に関する研究論文をどのようにまとめればよいのか、どのように研究論文を書くべきなのか基本的な事柄についてポイントを提示する。具体的には、(1) なぜ論文の書き方・まとめ方が重要なのか、(2) 研究論文によく見られる問題点、(3) 良い研究論文の規準、(4) 研究論文を読みやすくするためのポイント、について、これまでの個人の経験や大学院等での指導経験をもとに、自分の反省をも含めて提示することにする。

1. なぜ論文の書き方・まとめ方が重要なのか

- (1) いくら優れた研究内容であっても論文の書き方がまずければ、その研究は読んでもらえない
- (2) 論文の構成や表現を緻密に考えることで、新たに見えてくるもの(論点・課題・抜けなど)がある
- (3) 論文の質が高まっていくことで、研究者個人および学問分野全体の研究の質が高まる

2. 研究論文によく見られる問題点とは (卒論・修論指導の経験および個人の反省から)

<p>(1) 論理展開に無理がある</p> 	<p>(2) タイトルと本文に整合性がない</p> 	<p>(3) 重要用語の定義がない</p> 
<p>(4) 仮説の根拠があいまい</p> 	<p>(5) 研究方法が具体的でない</p> 	<p>(6) 結果が明瞭でない</p> 



(1) 論理展開に無理のあるケース

思いついたことを書いただけの、一貫性のないエッセーのような文（例：結局何を言いたいのか、述べられている先行研究やデータが結論とどう関係しているのかわからない）

(2) タイトルと本文に整合性のないケース

タイトルにあるキーワードが本文中どこにも出てこない（例：「EFL 環境におけるリーディング指導における音読の役割」という論文で EFL 環境のことが論じられていない）

(3) 重要用語の定義がなされていないケース

キーワードに当たる重要用語の定義がない（例：音読といっても多様な種類があり、どのようなものを音読とするのか定義しないと深い議論ができない）

(4) 仮説の根拠があいまいなケース

先行研究からなぜその仮説が出てきたのかわからない（例1：先行研究の考察が全くなされておらず、研究仮説がいきなり出てくる 例2：先行研究は紹介されているが研究仮説とどのように関連しているかわからない）

(5) 研究方法が具体的でないケース

どんな被験者にどんな方法で調査したのかわからない（例：読解力をテストしたとしているが、どんなレベルのどんな生徒で、どんなテストをしたのかわからないと、実験の結果を一般化することはできない）

(6) 結果が不明瞭なケース

統計的な記述が多く、結果の細部にこだわりすぎている（例1：仮説が多すぎて結果と考察が複雑すぎる 例2：統計処理に振り回され効果的に結果を提示できていない）

(7) 用語の使用に揺れの見られるケース

研究論文中の重要な用語に表記の揺れがあると、理解しにくくなる（例1：「気付き」、「気づき」、noticing、attention、・・・ 例2：learner、learners など）

(8) パターンが守られていないケース

論理パターン(4.2 を参照)が崩れると読み手は理解しにくくなる（例：～には A、B、C の3つあります。B は・・・、C は・・・。A はどこにあるの？）

(9) 図表の解説がないケース

図1や表1が示されているが、本文中に図1や表1の説明が本文中どこにもない

3. 良い研究論文の規準とは (JALT Journalの場合)

- (1) 読者にとって読み易いものか (readability for audience)
- (2) 英語教育との関連性があるか (relevance of problem)
- (3) 先行研究が適切にレビューされているか (review of published research)
- (4) 研究デザイン・方法がしっかりしているか (methodology, design, approach)
- (5) 考察に深まりがあり結論に示唆があるか (discussion, conclusion)
- (6) 論文の文章の質は適切なものか (quality of writing)
- (7) 指定されたスタイルに合っているか (follows APA style)
- (8) 全体的に評価できるかどうか (overall evaluation)

4. 研究論文を読みやすくするために

4.1 研究論文の構成とそのポイントを意識する (実証研究の場合)

研究論文の構成	ポイント
<p>序論 (introduction, review)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 導入部分 ・ 研究目的 ・ 研究動機 ・ 先行研究 ・ 仮説提示 	<p>本研究の重要性を読者に訴え本論へ導く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 読者が研究全体を見通せるように概観をわかりやすく紹介する ・ いったい何を研究目的としているのか具体的に提示し定義づける ・ なぜそれを今研究する必要があるのか説得力のある理由を提示する ・ これまでの先行研究・調査・仮説を整理し自分の研究に結び付ける ・ 先行研究の結果に基づき仮説・調査・分析内容を具体的に提示する
<p>方法 (study, method)</p>	<p>客観的かつ具体的に研究方法を示す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 仮説検証のために誰を対象にどのようなデータをどのように収集しどう分析するか、その方法が妥当かどうかを検討しながら具体的に提示する
<p>結果 (results)</p>	<p>実験・調査・分析結果をわかりやすく示す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 実験・調査・分析から得られたデータを統計処理などに基づき客観的かつ理解しやすい形で提示する
<p>考察 (discussion)</p>	<p>結果の原因を探り研究の課題を示す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 実験・調査結果がなぜそうなったのか先行研究の結果・調査方法などを踏まえて考察する／本研究の課題や限界を提示する
<p>結論 (conclusion)</p>	<p>結果から明らかになったことを明確にする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本研究から得られた結果を明確にし、その結果が理論および実践にどのような示唆があるのかを述べる

- ・序論の部分がうまく書けるかどうかは論文の良し悪しを決定する(よい序論を書くために4.2を参照)
- ・方法・結果・考察・結論の書き方にはパターンがある。その分野の先行研究論文での型を参考にするとよい。
- ・研究論文のタイプ(文献研究・実証研究・実践研究)にかかわらず、論文構成のポイントは共通している

4.2 論理展開の基本パターンを守る

(1) 3段論法を意識する

[現状→課題→解決]のパターンがしっかりとると論文の論点が明確になり、論文の価値が明確になる

3段論法の例 リスニング指導法としてのシャドーイングの効果

[現状]: センター試験にリスニングテストが導入される

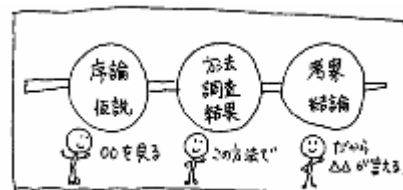
[課題]: リスニング力をつける指導方法がまだよくわかっていない

[解決]: 指導法の一つとしてシャドーイングが考えられるがその効果を調べる



(2) 一貫性を意識する

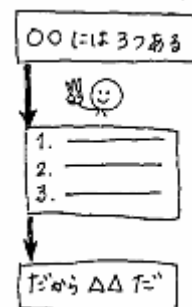
論文で一貫性とは、1つの主張を論文中で揺るぎなく提示することをさす。同時に、論文の主張のサポートとして無駄な部分をそぎ落とし、必要不可欠な部分のみを記述することをさす



(3) パラレリズムを意識する

パラレリズムとは、同じレベルの項目を並列させること。基本的なことであるが、修論など長文になるとできていないことが多い。これが論文全体、研究動機、先行研究、仮説提示など、節レベル、パラグラフレベルなどでできると文章が自然と引き締まってくる

パラレリズムのパターンの例



論文全体: **序論・仮説(○○を見る)** — **方法・研究・結果(この方法で)** — **考察・結論(△△が言える)**

研究動機: **研究テーマの現状** — **課題①②③** — **だから△△をみる研究が必要だ**

先行研究: **研究テーマ○○** — **先行研究①②③** — **そこから△△が言えそう**

仮説提示: **○○の仮説は3つあります** — **仮説①仮説②仮説③** — **そこから△△を見たい**

4.3 読み手の立場になって文章をデザインする

論文の読み手の立場になり、どのように書けば読み手が読みやすい書き方になるかを厳しい目で見直す

(1) タイトル・小見出しの工夫

論文のタイトルで使った用語はすべて研究の顔、キーワードとして具体化・定義づけする。小見出しとその配列を見れば論文の内容が予想できる書き方をする

(2) 専門用語の具体化

専門用語・業界用語を始めから当たり前のように使わない(例:インプット、シャドーイング)。読者がイメージしやすい形で、本論文ではその用語は何を指しているのかわかるよう具体例を示しながら定義づけし提示する(シャドーイングとは具体的に何を意味するのか)。定義づけが済んだ後、その用語を使うことができる

(3) 原稿修正の徹底

読者にとってわかりやすくなる形になるまで、投稿論文の原稿を何度でも修正する(論文構成、図表の見易さ、表現の適切さ、語彙の揺れ、説明・具体例の過不足、引用文献の欠落、誤字脱字など)

5. 最後に

論文を執筆する経験を積み、その反省をもとに論文の質が高まる。失敗を恐れずにチャレンジあるのみ

6. 論文の書き方・まとめ方に関する推薦図書

American Psychological Association. (2001). *Publication Manual of the American Psychological Association* (5th ed.). Washington, DC: Author.

引用、引用文献、図表の記述方法、用語や数値の扱いなど、論文のスタイルに関するすべてが網羅されている。中部地区英語教育学会紀要もAPAスタイルに準拠することになっている

倉島保美 (1999). 『書く技術・伝える技術』 東京: あさ出版

総論から各論へ、段落の重要性、パラリズムなど、わかりやすい文章を書く上での7つの法則をわかりやすく説明している

藤沢晃治 (1989). 『「わかりやすい表現」の技術』 東京: 講談社

論文だけでなく、表現全体を視野に入れた、わかりやすい表現を作るためのポイントを解説している

後正武 (1998). 『論理思考と発想の技術』 東京: プレジデント社

論理的な思考を磨くために、論点(イシュー)の見つけ方や正しい論理展開の方法など論理構成の原則を詳しく解説している

バーバラ・ミント(山崎康司訳) (1995). 『考える技術・書く技術』 東京: ダイヤモンド社

ストーリーを作り上げるように、現状→課題→解決策といった形で論を組み立てる演繹的方法や、ある主張にそれを支持する事例を並列させる帰納的な方法など、ピラミッド型に論理をつくる方法を紹介している

村上英二 (1998). 『英語の文章の仕組み』 東京: 鷹書房弓プレス

英語特有の談話構造の特徴から、新旧情報の流れからみた文と文のつながり、接続詞や指示語の使い方など、英語を書くにあたっての文章の作り方が解説されている